九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ラオス山地民族カー族の社会と生活

牛島，盛光
熊本商科大学

https://doi.org/10.15017/2231570

出版情報：九州人類学会報. 4, pp.14-19, 1976-12-10. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

ラオス山地民族カー族の社会と生活

熊本商科大学　牛島盛光

はしがき

筆者はこの数年、五木、五家荘、椎葉などの九州山地に狩猟・焼畑の残存文化を求めて歩いている。それは、ひえ、芋、赤米作りの伝承とか山の神の信仰儀礼の中に日本文化の基層構造をさぐる謎が潜んでいるように思えるからにほかならない。とくに日本人の個有信仰を考える場合、その中心的課題ともいうべき山の神の性格や稲の日本伝来と密接な関連性をもつといわれる赤米の農耕儀礼を理解するには、東南アジアの山地（焼畑地帯）に住む少数民族の生活文化との比較研究こそ絶対不可欠の要件だと考えるようになったのである。

フイールドとして筆者の関心度の高い順に挙げると、中国（雲南省）、ビルマ東北部山地、ラオス北部山地、ベトナム北部山地であったが、調査当時（１９７４年１０月〜１２月）、入国できるのはラオスのみであった。そのラオスも１９７５年５月の「解放」以後再び入国・調査は困難になっている。因みに、日本の民族学者（社会人類学者を含む）によるラオスの学術調査は、山地の少数民族、平地のラオ族ともに１９５７年８月、１９５８年４月の『東南アジア稲作民族文化総合調査』（団長：松本信広教授）が戦後最初ではなかったろうか。爾来１６年、ラオスは断続的な戦争状態にあって、都市周辺の観光旅行はとも角、たとえ学術調査の目的をもってしてもパテト・ラオ（ラオス愛国戦線）の勢力圏内にある山地に入ることは不可能であった。

Ⅰ　生活環境

筆者が調査の対象としたカー族の村バン・ホエドクは、サイアブリ県の県庁所在地であるサイアブリ町の南約１０Kmのところにあり、標高はほぼ５００ｍで、周囲には1,０００ｍ〜1,２００ｍクラスの山々が連なっていて、いわばその山麓部に位置していることになる。調査開始数日後、言語調査をしたとき、彼等の自称をたずねたらラオ・カーン（Lao Kang）と答えたが通訳に意味をきくと「山腹に住むラオス人」ということで、居住地の地理的条件を巧みに取り入れた造語である（奴隷を意味するカーkhaと呼ばれるのを嫌いプ・テンPhou Teng（高地に住む人）と自称するというのがこれまでの通説であったが、Lao Kangという自称は新発見資料であろう。）

村は、バン・ホエドク川に沿って、北東一南西に約１４０ｍ、北西－南東に約１２０ｍに展開しており、約１７０ａのところに土着の家２５戸と外来者の家４戸（政府軍２戸、政府軍未亡人１戸、小学校教師１戸）が建っている。

Ⅱ　人・家・家族

カー族の人類表徴について述べる前に、東南アジアにおける少数民族の歴史的系譜とその中に占めるカー族の位置を簡単に説明しておこう。ラオスの総人口１８８万人（１９６２年現在。現在は約３００万人）のうち、支配民族はラオ族で約１００万人（５３％）、カー族は約１０万人（5.3％）で少数民族の中ではトップを占めている。カー族は、その言語系統が土着のモンクメール語群に属していることでもわかるように、遠い昔においては山地はもとより平地にまで及んでいたラオスにおける優勢な支配民族であった。そこへ主として、北方からラオ語諸民族（今日のタイ人、ラオ人、ベトナム人）が水田農耕文化を携えて侵入し、先住のカー族を山地に追放して河谷および平野部の豊穣の地に定着した。その後更に主として雲南、トンキン方面から焼畑農耕と漢字の文化を持ったメオ族（苗族）・ヤオ族（傜族）が雲南山系の尾根伝いに南下し、山頂部に散布、生活圏を確保したのでカー族は再び民族移動を余儀なくされ、今日のように山腹部（Kang）に居住するようになったのである。バン・ホエドクのカー族はラオ族より一寸皮膚の褐色度が強い程度である。この点、Ehnic of Mainland Southeast Asiaの著者達、F.Lebar, G.Hickey, J. Musgraveが述べているとおりであるが、頭髪について同書で「波状毛も少しはある」というのと一寸ちがい、筆者によ成年男女約６０名の観察結果によれば、波状毛は皆無であった。また「北部タイとの国境近くのカー族には赤色直毛が報告されている」（同書）とあるが、ここでは全部黒色直毛であって、カー族の言語系統はオーストロアジアティク系またはモンクメール系という説もあるが、毛髪に関する限りむしろモンゴロイドに近い印象を受けた（ただし蒙古雛襞はほとんど見なかったが）。

身長は短身である。頭形示数は８０.０で短頭に近い中頭。顔形示数は７６.０で広顔、鼻形示数は８０.１で中鼻である。入墨の習俗は次第に消えて行くようで、筆者が見たのは、宿舎の主人であるアイ・マンとたまたまよそから遊びに来ていたやはりカー族の２人に過ぎなかった。女子の入墨はない。女子は結婚すると盛んにキンマをかむ。男子がかむのはほとんど見かけなかった。ここのカー族はキンマ（Bourith）の１セットとして、果実（Play）、葉（Phou）、木の皮（Rith）そしてタバコ（Ya）を考えている。筆者が未婚者と既婚者を区別するのにキンマが使われているのではないかと思ったのは、仲人が嫁もらいのために娘の家を２回目に訪ねるとき、酒と一緒にキンマ１対を持参するからである。老人ほど好物らしく、常用者の歯はオハグロのように真黒である。ここには既婚女性のオハグロの習俗はない。

村人の性格は、男女とも内気で無口な点、ラオ族一般が陽気でお喋りなのと対称的である。未婚既婚に限らず女性の警戒心の強さは格別で、例えば単身での写真撮影は全く不可能で、またインタビュー調査において、夫が同席しなければ口を開かないという例もあった。狩猟・採取経済の文化伝統を継承した山地民族にありがちな荒々しさは微塵もないのである。

住居は草ぶき屋根にカー語でLome（風）とよぶ千木とカツオ木（これには名称はない）をつけた高床式住居で、床も壁も竹が張ってあり、床の隙間からは床下に飼ってある豚、雞、犬が仲よく遊ん

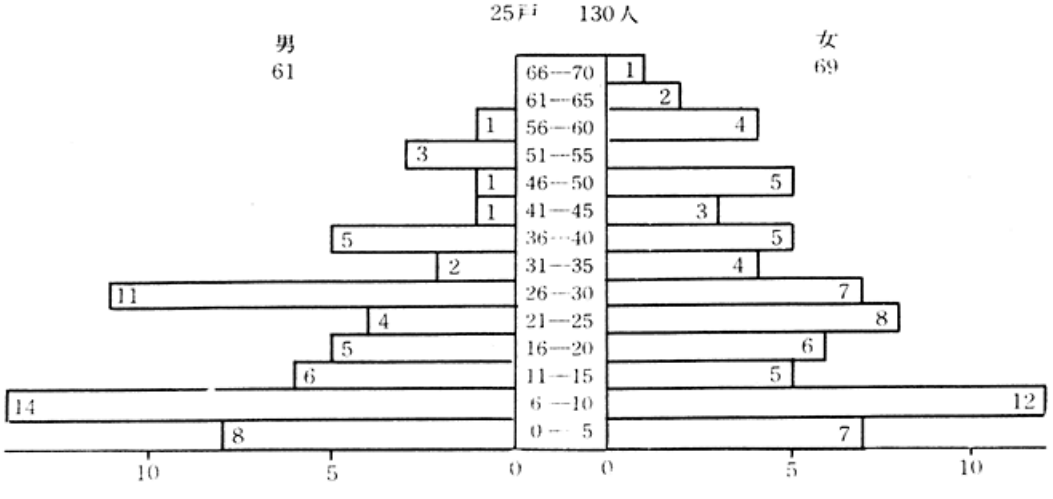
でいるのが見える。家屋のプランは先ず１ｍ〜1.5ｍのハシゴを登ったところのベランダにはじまる。客が泊るときは臨時の寝室になる訳で、柱だけで壁のないベランダと腰まで竹壁で囲んであるベランダが多いが、大きい家になると部屋全体を竹壁で仕切ってあり、母屋の室内とほとんど変らない本格的な作りのもあった。このベランダは夕食後の一家団楽の場所でもあり、隣近所の者が気軽に集ってお喋りをして行く所でもあり、いわば一家のサロン的機能を果しているように見受けられた。このベランダからすぐ母屋の居間兼台所に通ずる。その隣りが家族の寝室で、部屋数としてはどんな大きい家でもこの２つしかない。居間兼台所の広さは（最小と最大の家屋をそれぞれ１戸ずつ実測した）、６畳〜１５畳であった。部屋の１番奥まったところにイロリが切ってあり、灰の中央部に３個の石または鉄製の五徳を立ててあるところなど日本のイロリと寸分違わない。それに加えて筆者を驚かせたのは、極く最近まで九州の焼畑地帯の一つである五木村でみかけたアマ（ラオ語でHing，カー語でPeunrou）がイロリの上に吊ってあったことである。丁度唐辛子が乾してあった。イロリのまわりにはアルミ鍋と竹製の蒸し器からなるコシキ、蒸した米を冷やすための冷やし盆、竹で編んだライス・ボックス、竹製の水筒、塩ガメ、水ガメなどが雑然と置かれてあり、付近の壁には男の作業ズボンやシャツが下げてある。食事はこのイロリの近くで行うのであるが（炊飯、料理、食事法等については省略）、気のおけない親類などの宿泊にはここが使われることもある。次に隣の寝室であるが、ここには家族以外いかなる者も立ち入ることはできない。それはプライバシーの侵害からだけではなく、実は部屋の入口近くの壁にピー（祖霊）の神棚が設けてあるからである。寝室の広さは６畳〜１４畳で子供が小さいうちは寝室のなかに仕切りは作らないが、大きい子が居る家では、夫婦の部屋と息子・娘達の部屋を作り、それぞれ部屋の入口にはカーテンが下げられている。

母屋の付属建物は米倉で、骨組みは母屋と同様木材であるが、あとはほとんど竹が使われていて、床が高く高倉造りになっている。米の出し入れはハシゴを使って行う。ところで米倉は２５戸の家が全部持っているわけではなく、１７戸しかない。残りの８戸の家では、米の格納は母屋の台所の一隅に大きな（日本のマユかごを思わせる）竹籠を置いてそれを米倉の代用にしている。勿論８戸の家というのは米の収量が少ない（貧しい家）家である。

次にバン・ホエドクにおける結婚・家族・親族等の問題に触れよう。両親が息子の嫁をさがしてやるという古い習慣は、おおよそ２０年前頃から減って、現在では４０代以下の世代では全部恋愛結婚である。恋愛結婚の実態を数字で説明すると、バン・ホエドク２１戸（未亡人世帯４戸を除く）に２５組の夫婦がいるが、そのうち２１組（８４％）は恋愛結婚である。しかし結婚式までの手続きは古い習俗によっている。まず若い者同志が好きになり、双方の両親が同意すると男の両親は仲人に嫁もらいの世話も頼む。仲人は必ずしも一組の夫婦でなくともよく、人前でよく話ができる人がいいとされる。仲人が１回目に嫁の家に行くときは酒（米製の焼酎）１本を持参する。１回目は単なる打診である。２回目の訪問には紙に包んだキンマを１対（２包）と酒１本。このとき承諾の意志が表明される。３回目は日本流に言えば結納とも言うべきもので、仲人のほかに村長、村の長老そして花婿の

５人の者がうち揃って酒２本、ドブロク２本、　１羽、シン（スカート風の女の下衣）、純銀製の首輪と腕輪を持って行き、この日に結婚式の日取りが話し合われる。結婚式の当日、花婿はブライド・プライスとして酒４本、ドブロク４本、米１ガロン（１８ℓ）、豚１頭、自家製の笙（しょう。竹製の楽器）１本を花嫁の家に贈る。結婚式そのものはいたって簡単で村の長老が祝詞を述べるだけ。式後村中の者が集り、年に数回（結婚式が３〜４回、葬式が２〜３回それに年１回の正月祭り）しか口に入らない豚の肉を鱈腹食うのである。新婚夫婦は普通花嫁の家で３年間暮すことになっている。働き手を貰う代りに花婿の方も３年間一生懸命働いてお返ししなければいけないわけである。この習俗は、婚姻制度における妻方居住制（Matrilocal Residence）の残存現象としては理解できるように思えた。一夫多妻制は、これまた２０年前頃から姿を消し、現在１件もない。結婚の適令は女子は１８才、男子は２０才が最も多いが以前は２才位早かったという。通婚圏は、かつては１００％自村内に限られていたが、青年が軍隊（この村ではパテト・ラオの場合が多かった）に入ることによる村外女性との恋愛結婚によって通婚圏も今日では一層拡大されるに至った。インタビュー資料によれば２５組中、自村内１６件、他村９件で、その範囲は「歩いて１日のところ」（１５Km〜２０Km）というのが一番多かった。夫婦の財産は夫の存命中は彼の権限に属するが、死後は子供が成人するまでは妻のものになる。

バン・ホエドク人口構成表
〔1974年11月現在〕



家族構成は未亡人世帯を除く２１戸の平均が5.9人で、子供の数は必ずしも多くない。年令階層別にみると（表参照）、成年（２１才以上）において明らかに性別による有意差を認めることができる。即ち、①女性人口（３９人）が男性人口（２８人）にくらべ著しく多い。②４０才以上では女性人口（１５人）は男性人口（６人）の実に２倍半である。③最年長者は女性７０才、男性５６才である。疾病、平均寿命等に関する調査は時間不足のためできなかったが、１１才〜２０才の階層の落ち込みが著しい。あるいは内戦による食糧難、医療等の問題にかかわるのではなかろうか。

あ と が き

以上のレポートは、筆者が１９７４年１１月８日夕刻から１１月１６日夕刻までの８日間に実施したカー族の小林バン・ホエドクの文化人類学的調査の一部である。この期間中、サイヤブリの警察署長の出頭命令を受けて１泊２日を失っているから、正味は６日間の短期調査である。しかも毎日、村外に駐屯しているパテト・ラオがパトロールし、われわれの調査（とくにインタビュー調査）を鋭い目付きでジーッと監視しているという具合である。われわれと言ったのは、筆者の長男史彦（当時、同志社大学文学部文化史学科一回生）と青年通訳フーバンセン（ラオス人）が手伝ってくれたからである。両人に対し心から感謝したい。なお紙巾の都合で、主として調査データのうち人と家に関するものしか述べ得なかったが、ほかにも、１日の生活、教育、政治、経済、宗教、言語、歌謡等の項目が残っていることを付け加えておく。（１９７６．７．１１記）

調査周辺地図

東南アジア大陸部地図

SAYA BOURY

B. TINH

USAID HOSPIYAL

NAM HUNG

B.NATO

NAM TINE LUMBER MILL

△ 1000

B.PHONESAY

NAM TINH

ROUTE①

NAM THANG

MAGIC MT

△ 549

B.NAM HOUEIDOK

MEKONG

B.PHONE XIENG

△1000

B.HOUEIDOK

1551 △

MT.PHU SANG

731 △

m

0 500 1000

B.HOUEI DEUA

△ 385

B.HOUEI MONGKAI

△ 451

B.NAM TUANG